

VII 生きて働く力を育てる中等部の指導

中学部主事 山里一夫

1 研究取り組みの経過

(1) 初年度（昭和57年度）

本校の研究主題にそって、「豊かな心」「たくましい行動」について理論研究を行った。その中で、私たちが子どもたちの「豊さ」「まずしさ」「たくましさ」「ひよわさ」などをどう把えているか、6名の担任教師が、子どもの実態から考えられるもの全部だし合ってまとめてみた。その結果から、次のことが考察された。

- ① 4項目の状態像をみると、4項目は相互に関連しあって、4項目の内容は、それぞれ表裏の関係にあるようだ。
- ② どの内容をみても、道徳性あるいは正邪善惡が、担任教師の判断の基準になるようだ。
- ③ 4項目とも、それぞれ同じような内容をまとめてみると、心の深まり（豊かさ）行動の幅広さ（たくましさ）に5つのタイプがあるように思えた。

以上の点をふまえて、次のような仮説をたて、主題を追求することにした。

現時点の子どもの姿を、その子の「豊かさ」「たくましさ」の原点＜持ち味＞である。それを質量共に充実させ、生活の中で「生きて働く力」として定着させていくことが、社会的自立につながる。しかし、「まずしさ」「ひよわさ」も子どもの個性であり、必ずしも問題点ばかりとは言えない。

この仮説を検証するため、まず中学部生徒の心と行動にみられる共通点を次のように把え、問題となる心・行動を焦点化して共通理解し、授業を取り組んだ。

- ① やさしく思いやりがある。 ② 喜怒哀楽の感情を素直に表わす。 ③ 行動が人の言動に左右され、自主的な動きがない。 ④ 協調性がない。 ⑤ 飽きっぽく、根気が続かない。

(2) 二年次（昭和58年度）

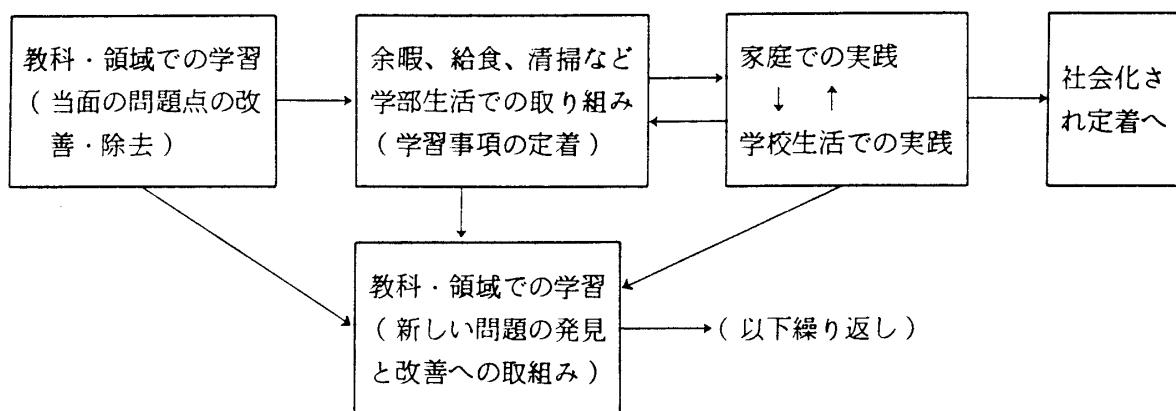
豊かな心をもちたくましく行動する子の育成には、生活の中で生きて働く力を発揮することが大切で、そのための効果的な指導法の工夫を、二年次の研究の柱とした。授業の構成にあたって、「授業は、生徒のやる気（意欲）と関係があり、現われる行動は、社会的に承認され、社会化の方向性をもつもの」という条件設定をしたうえで、基本となる学習過程を次表の通り設定し、効果的な指導法の工夫に努めた。

導入の段階	展開の段階	発展の段階
① 興味・関心・意欲の発生。 ↓ ② 興味をもつ。 }意欲をもつ 関心をもつ。	① みんなの中で取り組む。 意識して取り組む。 ↓ ② 興味・関心・意欲の持続	① よろこびをもつ。 ↓ ② 生活の中でわかる。

具体的には、岸本が家庭科の基礎縫いという単調な学習を行事单元の中で効果を挙げていること。中村が、合同音楽の中で、歌の情景場面の絵と曲を結びつけて成功した事例。宍戸が、作業学習（木工）で、実物提示、共同作業から意欲的な取り組みについて提言した。さらに徳田は、国語科で「話すこと」と取り組み、絵カード・文字カードをゲーム化して使用することの効果性を発表し、盛山は体育科の中で、題材の単純化と賞賛・励ましの工夫から、生きて働く力の育成について提言した。

2 昭和59年度の取り組み

1学期に学習して、わかった、できたと思っていた事が、わかっていないなかったり、できなかったりで落胆させられる事がしばしばある。物事を理解し行動に移されても、その事が身につくまでには、長い学習の過程をふむ必要がある。中学部が取り組んだ研究のしめくくりとして、ひとりひとりが学習したことを、どう身につけたか、（定着させたか）を確かめる必要がある。これが「生きて働く力」の育成である。従って、ひとりひとりの問題点も改善・除去の方法も異なってくるわけで、今年度は、個人の事例を通じ、当面する問題との取り組みを研究の重点に取り上げたのである。「生きて働く力」の定着と学習の関係を次のように示すことができると思う。



この表でもわかるように、「生きて働く力」が定着する過程は、授業 → 学級生活 → 学校生活 → 家庭生活 → 社会生活という道順を歩むだけでなく、授業 ⇌ 学級、学級 ⇌ 学校 ⇌ 家庭と、繰り返し繰返しの取り組みと具体的な場での取り組みが大切なのである。

以上のような観点から、岸本は、数的分野での概念形成という学習を音楽科と合科統合をすすめる中で、劣等意識を克服し、意欲的に活動するO児の場合から提言した。

橋本は、緊張場面での緘黙傾向のあるK児が、生活単元学習の中で、緊張をほぐし言語表現を活発にしていく過程から提言した。宍戸は、昨年度から継続して作業学習と取り組み、N児が集団に少しづつわっていく過程を農園活動を中心に提言したつもりである。

小沢は、何事につけても消極的で注意散漫なO児の集中力育成に注目し、共同製作の貼り絵を通して、やる気の発生・持続について提言した。杉谷は、積極的な活動も注意散漫なために集中力を欠き、でたらめな行動のみられるI児の意欲的な活動の持続に効果的な指導から提言した。

徳田は、緊急場面で積極的に行動ができないT児が、生徒会役員に立候補し、その活動を通して、学級集団から学校集団の中でと、活動していく様相から提言した。

3 研究の反省と今後の課題

理論的な追究にはじまり、個人事例と取組んだ三年間の研究を通して、次の事が考察され、反省した。

- ① どの子も例外なく、その子の心の動きを「豊かである」と把え、それを個性と承認した上で研究実践と取り組むべきである。
- ② 「豊さ」「たくましさ」は、教師の側からの主観的な把握がされがちだから、できる限り多くの教師が話し合い、各生徒の人間像・問題点を共通理解する必要がある。
- ③ 人間には、それぞれ長所・短所があり、「豊さ」「たくましさ」の他に「貧しさ」「ひよわさ」も含めて、全人的な視野にたって、問題点を考え取り組むべきである。
- ④ 「豊さ」「たくましさ」を育てる指導も、別に新奇を追うようなものがあるのではなく、精薄教育の基本に立って、次のことを留意し、根気強く取り組むことである。
 - 精薄教育の原則<具体化・生活化・反復練習・個別化など>に立った指導
 - 賞賛・励ましは意欲の持続に不可欠な要素である。
 - 視聴覚機器の活用、絵カード・文字カード・治具<はたぐ>などを工夫し、教材の単純化・具体化が、意欲の持続に効果を発揮している。
- ⑤ 子どもの自主的な活動をめざしたが、まだ、教師主導型であり、教師や友だちとの人間関係を豊かに育てることが大切である。
- ⑥ 個人実践を通した報告をしたが、今後他の子どもに通用するか検証が必要である。
- ⑦ 家庭との連携を密にし、学習定着の場として活用できるよう、教師、保護者の一体感が重要である。

以上、中学部の取り組みの概要について述べた。次の項より各担任が実践研究をまとめて提言しているが、必ずしも十分で満足のいくものではない。多くの同士の助言・指導を得て、子どもたちの社会への巣立ちを「豊かでたくましい」ものへと努力を積み重ねていきたいと考えるのである。